

## 第2回 最高裁包囲ヒューマンチェーン(公正な司法を求めて1200名が結集！)

6月16日(月)、複数の訴訟当事者団体が共同で呼びかけ、開催されました。巨大な敷地を有する最高裁判所を約1200名もの市民が「人間の鎖」で取り囲む歴史的な取組みでした(下写真)。「原発事故の法的責任は国にはない」という2022年6月17日の最高裁判決を経て、その後、コピペ判決が各地の住民訴訟で続いています。(昨年11月末、子ども脱被ばく裁判も最高裁において不当な棄却決定がなされました。)この間、判決に関わった中には東京電力と人的、金銭的なつながりが指摘されている最高裁判事存在が明るみになり、司法の独立・公平性がぐらぐら揺らいでいます。被害者は苦しみ、加害者は免責。人権を擁護する砦としての司法の存在意義や自浄作用が問われています。当日動画等、主催者サイトにて公開されています。ぜひご覧ください。

<https://saikousai617.hatenablog.com/>

いずみ事務局 服部



2025年6月16日 最高裁判所にて 右上写真提供は水戸喜世子さん

### 今後の予定 (詳しくはいずみホームページをご覧ください)

9月以降 甲状腺エコー検査 in

なとり、かくだ、おおがわら、せんだい ほか



「いずみ」の活動は国内外の支援活動によって支えられています。この活動を続けていくためにみなさまのご支援、ご協力をお願いいたします。献金、ご支援は下記専用口座をご使用下さい。

#### ご支援のお願い

送金先金融機関 ゆうちょ銀行

口座番号 02270-2-114887

加入者名 いずみの会

通信欄に 会費(一口2000円)、または、献金(支援)とお書き下さい。

運営委員長 小林 休(鳴子教会)

運営委員 小林 休(鳴子教会) 鈴木のぞみ(川俣教会)

寺田 進(原町教会) 布田秀治(いずみ愛泉教会)

協力委員 保科 隆

顧問 篠原弘典(原子核工学専攻)

スタッフ 田村和恵 服部賢治

会計協力 渡辺広衛

### 日本キリスト教団東北教区

#### 放射能問題支援対策室いずみ

UCCJ Tohoku District Nuclear Disaster Relief Task Force "IZUMI"

〒980-0012 仙台市青葉区錦町1丁目13-6

TEL/FAX 022-796-5272

メールアドレス izumi@tohoku.uccj.jp

ホームページ <http://tohoku.uccj.jp/izumi/>



# いずみ

題字 丹治正雄氏

## 甲状腺検査100回を迎えて

国内外の専門家で作る「若年型甲状腺癌研究会(JCJTC)」が、今年6月12日、福島県に対して甲状腺検査に関する要望書を提出しました。今、福島県が原発事故当時18歳以下の子どもたちを対象に行っている甲状腺検査(2025/5/17現在399人の甲状腺癌の悪性・悪性疑いが確認され、内298人が手術で癌確定)は、子どもや若者に多大な不利益を与えているから見直した方がいいと言うのです。根拠にしているのが「過剰診断」です。「過剰診断」とは、一生涯、患者に悪さをしない癌を精密検査によって過剰に見つけてしまうというものです。団体のメンバーの高野徹氏は次のように述べています。

「甲状腺癌は、癌の中では非常に予後が良く、特に若年者の甲状腺癌はたとえ転移・再発しても命を奪われることはめったにありません。罹患しても無症状のまま生涯発見されず、死後剖検で初めて発見される例も多い癌です。そのため、無症状のうちに早期発見・早期治療を行うことで得られる利益よりも、早過ぎる診断による不利益のほうが大きくなりやすいのです。」(週刊医学界新聞(通常号):第3408号)

確かに今回の甲状腺癌の多発については、一定程度、集団検診によるスクリーニング効果も含まれている可能性もありますが、どこか他人事で楽観的に聞こえるコメントと裏腹に、3.11子ども

甲状腺がん裁判の原告のひとり、医師から「手術しないと23歳までしか生きられない」と言われた時の思い、2度の手術の上、肺に転移したがんを取り除くために、アイソトープ治療という被ばくの原因となった放射性ヨウ素をもう一度体内に取り入れるという壮絶な治療について、日常生活が一変し夢と希望が絶たれた人生を赤裸々に語っています。(下記のQRコードからお読みください。)またこの検査で180人の手術を担当した、福島県立医科大学医学部の鈴木眞一教授は「術後の診断で72%がリンパ節転移しており、組織外浸潤も47%、腫瘍が小さく、リンパ節の転移がない低リスク症例は7.2%(13例)、また手術した患者のうち6%が再発し、再手術したと報告しています。

「過剰診断」だけでなく「福島はもうだいじょうぶ」「いつまで気にしてるの?」という声がますます広まっている今、「放射能は怖い、不安だ」との声も、甲状腺検査や保養という取組みも「風評被害」「偏見や差別を助長する」としてかき消されています。しかし、原発事故由来の「放射能」は今もあり、風評ではなく被害が今起きているのです。100回を迎えたいずみの甲状腺検査は「不安だから続けてほしい」の声に応えてきました。この声がある限り、続けていきたいと思えます。

2025年 6月記

東北教区放射能問題支援対策室いずみ

運営委員長 小林 休



3.11子ども甲状腺がん裁判 原告の意見陳述要旨

# 【活動報告】2024年度 甲状腺エコー検査

## 累計・年次報告



甲状腺検査判定結果 累計表 (2013年12月～2025年3月)

年 度	A1	A2	B	C	検査者数* (カッコ内大人)
2013～2023年度	2,191人	2,105人	74人	0人	4,370 (396)人
<b>2024年度</b>	<b>127人</b>	<b>91人</b>	<b>9人</b>	<b>0人</b>	<b>227(75)人</b>
総 計	<b>2,318人</b>	<b>2,196人</b>	<b>83人</b>	<b>0人</b>	<b>4,597 (471)人</b>
小数点2位以下四捨五入	(50.4%)	(47.8%)	(1.8%)		

判定	内 容	解 説
A1	結節やのう胞を認めないもの。	現時点では何も見あたらず問題ありません。
A2	5mm以下の結節、 20mm以下ののう胞を認めたもの。	小さなう胞や結節（しこり）が見つかりました。特に心配することはありませんが、経過を観察していきましょう。
B	5.1mm以上の結節、 20.1mm以上ののう胞を認めたもの。	二次（精密）検査をおすすめします。
C	直ちに二次検査を要する。	専門医・機関での二次（精密）検査が必要です。

\* 事故当時18才以下の方（子ども）を主な対象者とする。ただし、事故当時19才以上の大人や事故後出生者含む。

### 2024年度 甲状腺検査結果

No	開催日	実施地域	検査者数	検査医師（敬称略）
第94回	2024年6月22日	白石市	19人	寺澤政彦
第95回	2024年7月28日	柴田町	37人	寺澤政彦
第96回	2024年9月29日	亘理町	29人	寺澤政彦
第97回	2024年10月20日	丸森町	29人	寺澤政彦・山崎知行※
第98回	2024年11月30日	角田市	25人	寺澤政彦
第99回	2024年12月14-15日	仙台市	44人	寺澤政彦
第100回	2025年2月15日	石巻市	30人	寺澤政彦
第101回	2025年3月22日	塩釜市	14人	寺澤政彦
計	8回（9日間）	合計	227人（事故時19才以上の大人75人含む）	

※健康・医療相談担当

## 被ばくに晒されたいのち、未来を支える取組みを引き続きお祈り、ご支援ください

2024年度は宮城県内8地域で9日間の検査日を設け、合計227名への検査を実施いたしました。福島原発事故から14年過ぎた今もご支援いただいているすべてのみなさまに関係者一同、心からの御礼を申し上げます。

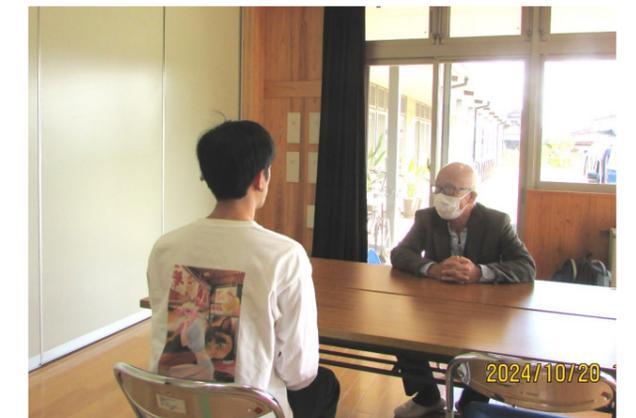
検査にあたってくださった寺澤政彦医師（てらさわ小児科）。今も大阪教区による派遣支援が継続され、カウンセリングやサポートのためご参加いただいている山崎知行医師（上岩出診療所）をはじめ、毎回のようにご参加くださったサポートスタッフのみなさま。検査の周知のために度々ご協力いただいただけでなく、検査会場を無償提供くださった「生活協同組合あいコープみやぎ」。そして、各地での検査実施のためにご奔走、ご尽力くださった地元支援者のみなさま。また、要精検者さまを受け入れてくださる医療機関のみなさま。そして、いつもあたたかなご支援、献金をお寄せくださる日本キリスト教団や関係諸団体、全国17教区、各地教会のみなさま、サポーターみなさまへの御礼を申し上げます。通常ではありえない被ばくりスクに晒され続けている子どもたちの健康を見守り、この社会の未来を支える取組みへのご理解、ご支援をまことにありがとうございます。

前号においても触れていますが、2024年度においては福島県と県境を接する丸森町において2015年4月以来、町内では約9年ぶりとなる2度目の検査会を実施させていただきました。

丸森町では、原発事故当時18歳以下だった町内の子どもたちを対象に、町が独自に甲状腺検査を実施していました。町では2012年から3年おきに繰り返し検査を実施されてきましたが、3回目をもって町による検査を終えられた経緯がありました。宮城県内で唯一、公的検査が行われていたのですが、終了後から時間が経ち、町民の方から「いずみ」へのご要望をお寄せいただき丸森町での検査会実施に至りました。現地における空間線量値は減衰により下がっているものの、原発事故当時、県境で放射能は止った訳ではありませんでした。放射性ヨウ素等、初期被ばくや内部被ばくの影響に配慮した甲状腺エコー検査の機会提供を今後も続けていきたいと考えています。

幸いにも、昨年度、日本キリスト教団のご支援により新しい検査機器が備えられました。そして、毎年、教育委員会呼びかけによるクリスマス献金により資金面での大きなお支えをいただいています。

引き続きこの取組みをご支援、ご指導くださいますようお願いいたします。



左写真：亘理町内での甲状腺検査の様子（寺澤政彦医師）、右写真：受検者への検査結果説明の様子（山崎知行医師）

# 【ご支援御礼】宮城県内での甲状腺エコー検査会開催が100回を数えました！

ここからスタートしました！

No	開催日	実施地域	検査者数
第1回	2013.12.8	仙台市	52名
第2回	2014.3.30	仙台市	48名
第3回	2014.5.18	仙台市	42名
第4回	2014.7.6	仙台市	33名
第5回	2014.8.31	白石市	55名
第6回	2014.9.21	仙台市	45名
第7回	2014.10.26	角田市	52名
第8回	2014.11.16	仙台市	37名
第9回	2014.12.7	白石市	45名
第10回	2014.12.23	仙台市	27名
第11回	2015.1.18	仙台市	50名
第12回	2015.2.21	仙台市	68名
第13回	2015.3.8	柴田町	42名
第14回	2015.4.12	丸森町	46名
第15回	2015.5.24	仙台市	33名
第16回	2015.6.28	栗原市	42名
第17回	2015.7.26	柴田町	44名
第18回	2015.8.9	白石市	45名
第19回	2015.9.6	大河原町	97名
第20回	2015.10.25	角田市	65名
第21回	2015.11.29	大河原町	57名
第22回	2015.12.6	仙台市	58名
第23回	2015.12.20	仙台市	46名
第24回	2016.1.24	白石市	55名
第25回	2016.2.21	川崎町	53名



上写真：西尾正道医師 2013年12月8日 第一回

中写真：左から、寺澤政彦医師、大塚純一医師、宇根岡實歯科医師

2014年3月30日 第二回

下写真：藤田操医師 2015年4月12日 第十四回

No	開催日	実施地域	検査者数
第26回	2016.3.13	柴田町	69名
第27回	2016.4.24	柴田町	62名
第28回	2016.5.15	仙台市	63名
第29回	2016.6.26	栗原市	42名
第30回	2016.7.9	名取市	66名
第31回	2016.9.3-4	大河原町	155名
第32回	2016.10.30	仙台市	42名
第33回	2016.11.27	角田市	60名
第34回	2016.12.18	仙台市	60名
第35回	2017.1.22	仙台市	41名
第36回	2017.2.12	川崎町	38名
第37回	2017.3.26	蔵王町	73名
第38回	2017.4.23	蔵王町	29名
第39回	2017.5.21	仙台市	51名
第40回	2017.6.25	白石市	47名
第41回	2017.7.23	仙台市	32名
第42回	2017.8.26	名取市	53名
第43回	2017.9.17	仙台市	42名
第44回	2017.11.18	仙台市	62名
第45回	2017.12.23	角田市	48名
第46回	2018.1.28	仙台市	38名
第47回	2018.2.25	角田市	61名
第48回	2018.3.25	加美町	69名
第49回	2018.4.1	川崎町	58名
第50回	2018.5.13	石巻市	56名



上写真：保科隆いずみ室長（当時）と寺澤政彦医師  
2017年8月26日 第四十二回（名取教会にて）

ご支援ありがとうございます

東北教区放射能問題支援対策室いずみ

西尾正道先生、寺澤政彦先生、大塚純一先生、宇根岡實先生、藤田操先生、溝口由美子先生、今川篤子先生、山崎知行先生、宮城民医連様、宮城県保険医協会様、いわき放射能市民測定室たちね様、関東子ども健康調査支援基金様、Annaka ひだまりマルシェ様、放射線測定室ととと様、検査サポーターのみなさま、各地域での協力団体・個人のみなさま、要精検者を受け入れてくださる医療機関のみなさま、3・11甲状腺がん子ども基金様、日本キリスト教団や教育委員会、東北教区など全国17教区、全国教会のみなさま、国内外でご支援いただいているみなさま、具体的にご支援、ご指導いただいたすべてのみなさまに心からの感謝を申し上げます。

# 累計(のべ)検査者数は 4,597名 (2025年3月末時点)

No	開催日	実施地域	検査者数
第51回	2018.6.24	蔵王町	58名
第52回	2018.7.22	白石市	39名
第53回	2018.9.1	白石市	35名
第54回	2018.9.15	柴田町	38名
第55回	2018.10.28	柴田町	59名
第56回	2018.11.25	角田市	66名
第57回	2018.12.9	石巻市	43名
第58回	2019.2.9-10	仙台市	94名
第59回	2019.3.16	栗原市	48名
第60回	2019.4.14	川崎町	56名
第61回	2019.5.26	石巻市	31名
第62回	2019.6.29	名取市	72名
第63回	2019.8.1	蔵王町	49名
第64回	2019.9.29	白石市	43名
第65回	2019.10.20	仙台市	31名
第66回	2019.11.16	仙台市	27名
第67回	2019.12.21	角田市	61名
第68回	2020.1.19	仙台市	33名
第69回	2020.3.14	栗原市	23名
第70回	2020.7.26	白石市	5名
第71回	2020.9.12-13	仙台市	67名
第72回	2020.11.14	仙台市	37名
第73回	2020.12.20	角田市	32名
第74回	2021.5.29	白石市	24名
第75回	2021.6.26	名取市	33名

No	開催日	実施地域	検査者数
第76回	2021.7.25	柴田町	32名
第77回	2021.11.27-28	角田市	47名
第78回	2021.12.12	石巻市	29名
第79回	2022.5.28	白石市	20名
第80回	2022.6.26	柴田町	46名
第81回	2022.7.31	柴田町	23名
第82回	2022.9.17-18	仙台市	58名
第83回	2022.10.15	名取市	24名
第84回	2022.11.26	角田市	36名
第85回	2022.12.11	石巻市	32名
第86回	2023.6.3	柴田町	30名
第87回	2023.6.25	白石市	30名
第88回	2023.7.29	亘理町	23名
第89回	2023.11.4	名取市	18名
第90回	2023.11.25-26	仙台市	70名
第91回	2024.2.25	石巻市	34名
第92回	2024.3.16	塩釜市	27名
第93回	2024.3.30	蔵王町	33名
第94回	2024.6.22	白石市	19名
第95回	2024.7.28	柴田町	37名
第96回	2024.9.29	亘理町	29名
第97回	2024.10.20	丸森町	29名
第98回	2024.11.30	角田市	25名
第99回	2024.12.14-15	仙台市	44名
第100回	2025.2.15	石巻市	30名
第101回	2025.3.22	塩釜市	14名

## 甲状腺エコー検査100回記念に寄せて

子どもの健康を考える会・いしのまき

齋藤みや子

本年2月に実施された甲状腺エコー検査会は、「放射能問題支援対策室いずみ」による記念すべき100回目の検査会でした。改めて、県内各地を巡って無料検査会を企画・実施して下さったことに深く感謝申し上げます。

石巻で第1回目の検査会を開催したのは、東日本大震災と福島第一原発事故から7年が経過した2018年5月13日でした。その1年前、3歳と0歳の子どもを育てていた友人は、母乳を与えることにずっと不安を感じており、思い切って尿検査を受けたところ、セシウム陽性という結果に衝撃を受けました。その後、母乳の検査機関で検査を受け、ようやく陰性という結果を得るまでには、長い時間と大きな不安を伴う道のりがありました。その彼女から寄せられた願い——「子どもの成長を見守っていくために、甲状腺エコー検査がある。ここ石巻でもエコー検査会を実現させたい」——を受け、「子どもの健康を考える会・いしのまき」を立ち上げ、第1回検査会の開催に至りました。以後、私たちは毎年検査会を継続してきました。

エコー検査会のチラシには、「じょっこ検査」という言葉を添えています。「じょっこ」とは石巻地方の方言で、「かわいい子ども」という意味です。エコー検査は病気を発見するためだけでなく、健やかに育っていることを確認する機会でもあってほしい、という願いを込めています。

毎年、定員に達する多くのお申し込みをいただいております。そのうちの約半数は初めての参加となるご家族です。3.11以降の暮らしや子育てに、いまだ不安を抱えている方が多くいらっしゃるこの証であり、エコー検査会が今なお必要とされていることを実感しています。

今後も、「放射能問題支援対策室いずみ」のご活動に、大きな期待と感謝を寄せています。

2025年6月記



## 人と人がつながって輝く生命、未来

子どもの健康を考える会・いしのまき

長沼利枝

甲状腺エコー検査会に際し、いずみさんがかわいらしいデザインのチラシを届けてくださいます。チラシ一枚に様々な思いが束ねられ、いくつも物語も生まれたことでしょう。

スタッフは検査会の参加者が、子どもであれ、付添いの両親や自身の健康を心配する大人であれ、安心して検査が受けられるよう心地よい音楽をはじめ、室内のしつらえにも心を砕いています。検査結果によっては適切な助言ができるようにと緊張感をも併せ持っています。こうした蓄積は時間をかけて人々が正しく判断していく糧になります。きっと。

一方、地元紙によると、宮城県は2025年度、女川原発の5～30キロの自治体に核燃料税交付金増額を決めた。対象は2024年度から立地2市町(石巻市、女川町)に加え、UPZ(東松島市、登米市、涌谷町、美里町、南三陸町)の5市町に拡大された。5市町は交付額の増額を求めている。とりわけ、核利用、原発推進に関しては、お金の物言えなくされ、地方自治が形骸化されていくように感じられます。目先のお金で安全と安心が買えるわけでもないのに。

2025年6月記

# 【開催報告】ドキュメンタリー映画「決断～運命を変えた3.11母子避難～」自主上映会 in せんだい

2025年2月24日、仙台市内にて「決断」（安孫子亘監督 2024年製作）上映会を開催いたしました。上映後には避難区域外とされる福島県いわき市から今も避難されている、当事者お二人からお話しをお聞きいたしました。会場を埋める60名以上が参加し、熱心に映画やお二人のお話しに耳を傾けました。以下、ご報告いたします。

## ドキュメンタリー映画「決断」について

2011年3月、原発事故が起きた頃、とくに当初はベクレルやシーベルト、メルトダウンという言葉の意味がよく知られていなかったように、環境中への放射性物質拡散という危険性や不可逆性が現在ほど浸透していませんでした。メルトダウンしていることを数カ月後になってようやく発表した東京電力をはじめ、放射性物質拡散予測という、周辺住民にとって極めて重要なスピーディー（緊急時迅速放射能影響予測ネットワークシステム）公表も遅れ、事故直後の混乱期において、放射線防護に関する国や行政による情報発信は必ずしも十分ではありませんでした。さらには、国による避難指示が事故原発より20キロ圏内から30キロ圏内へと拡大された一方、アメリカは日本国内に滞在していた自国民に対し80キロ圏外へ退避するよう要請、指示していました。大量の情報が錯綜していた当時、あるいは、通信ライフラインが絶たれた被災者にとって、何が安全で何が危険なのか、信頼できる情報へのアクセスが困難でした。さらに、事故前と比較して、放射線に関するさまざまな基準がある日突然に引き上げられ、放射性物質が忍び寄り限られた時間の中、未知の危険に対しどう対処するのか、誰もが、大混乱の中で「決断」しなければならませんでした。



小林 休 運営委員長による閉会あいさつ



画家・小林憲明さん作画のレプリカが飾られた会場の様子

映画では避難指示区域外とされた、福島や郡山市、南相馬やいわき市などから県外に避難した10家族が出演し、避難へ至る決断、生活再建の経緯や近況、健康の変化、もしくは、加害者への責任追及（訴訟）の様子などがインタビュー形式で映し出されています。あたりまえかもしれませんが、避難当事者自身によるお話しはとても大きなインパクトとリアリティを持って迫ってきて、あの震災と原発事故を追体験しているかのように、子どもたち、そして、家族を守るため、最善を尽くすために必死だったことがひしひしと胸に迫ってくる内容でした。（機会があればぜひご覧ください。）一方で未解決の事柄も少なくありません。

## 映画出演・区域外避難当事者のお話し

ここで知っていただきたいのは、チェルノブイリ原発事故被災地では「避難の権利」が与えられているような放射性汚染が確認された地域＝福島市や郡山市、いわき市など、広範な地域が日本では“区域外”として線引きされ、追加被ばくを避けたり、長期避難のコンセンサスが得られていないことです。後述もしますが、自宅敷地が未だに放射線管理区域に相当、厳然とした土壌汚染が残っていても、そこでの居住によりいのちや健康への不安を拭えなくても、被ばくを避ける手立てが日本では正当に受容されていません。区域外避難者への住宅支援が2017年3月末、一律に打ち切られましたが、中には生活困窮や将来不安のため自殺者が出るなど、個別には支援が必要な避難者が少なくないと強く推察されます。



原発敷地内の放射線管理区域では、労働従事者への個人線量計装着、放射線被ばく量の測定や記録、定期的な健康診断が事業者により義務付けられているにもかかわらず、事故で高濃度に汚染された生活圏では、（区域内外にかかわらず）相当に汚染されていても子どもを何の配慮もなく遊ばせたり、住まわせるという二重施策が行われているのが現状です。これは避難当事者だけが直面している問題ではなく、今現在も汚染地域にやむを得ず居住している方々やふるさとに帰還した方々、あるいは、今後も起きる可能性がある核（原発）事故被災地、全ての方々が当事者になりうる大切な事案ではないでしょうか。

## 「放射線被ばくから免れ、健康に生きる権利は基本的人権」

上映後は映画にも出演していて、かつ、区域外避難当事者である鴨下さんご夫妻(9p上写真)からお話しをお聞きする時間を設けました。ご夫妻はいわき市にお住まいでしたが、原発事故後、まもなく都内へ避難されました。はじめは家族で避難されましたが、夫の祐也さんが勤務する高校が4月に再開されることになり、祐也さんだけがいわき市内の自宅に戻り、妻である美和さんが二人の子どもとともに避難する二重生活を選択せざるをえませんでした。学校再開、といっても、再開前に測定したり、安全が確認された訳ではなく、文科省や教育委などが前のめりに決定しただけでした。祐也さんは工学博士で放射性物質の扱いについても専門的知識を有していました。戻った祐也さんは学校に何台かサーベイメーターがあったため校内の空間線量を測定したところ、通常ではありえない高い値を指し示していました。

それは、野外だけでなく、一時避難のため閉め切っていた自宅、屋内についても同様でした。自宅床のホコリを拭き取ったダストモップを測定したところ、放射性物質が検出されたのです。微小な大きさの放射性物質が生活環境中に飛来、紛れ込んでしまった実態のご報告とともに、追加被ばく回避のため、学校内での清掃などを子どもたちにさせないための関係者とのやりとりなど、緊迫したご様子を共有していただきました。そして、今も避難せざるを得ない理由として、2024年1月にいわき市内の自宅敷地内の土壌を測定したところ、未だに4万ベクレル/m<sup>2</sup>以上、放射線管理区域に相当する放射能汚染が存在していることをご報告いただきました。今もなお、区域外とされた地域であっても生活圏のところどころに深刻な汚染が残っています。原発事故の風化はやむを得ないのかもしれませんが、自然災害と異なり、人災により引き起こされた放射能汚染は長期的対応が必要であることがよくわかるお話しでした。

最後に、映画内でも映像化されていますが、2018年3月19日、スイス・ジュネーブの国連人権理事会でスピーチされた避難当事者、森松明希子さんのメッセージの一部をご紹介します。

「原発事故直後に放射能汚染が広がりました。私たちは何の報告もされないまま何度も不必要に放射能を浴びました。健康を保つために放射線被ばくを避けることは基本原則です。（中略）私たちを助けて下さい。福島と東日本の人々。特に脆弱な子どもたちを更なる放射線被ばくから守って下さい。」（以上「決断」内、日本語訳より引用）

まだまだお伝えしなければならないことがあるのですが、字数の制約上ここまでです。鴨下ご夫妻のお話し（動画）等、いずみサイトにて公開しています。お時間ございましたらぜひご覧ください。

[http://tohoku.uccj.jp/izumi/?page\\_id=18418](http://tohoku.uccj.jp/izumi/?page_id=18418)

東北教区放射能問題支援対策室いずみ 服部賢治

# 放射能問題支援対策室いずみが協力した取組み2件（終わらない原発事故と支援継続について）

## 横浜でお待ちしています（GW家族保養）

2025年 5月3日～5日「リフレッシュ@かながわ」報告

神奈川県東日本大震災被災者支援実行委員長 小笠原敦輔

私は前委員長の斉藤圭美さんより引き継いで、2025年度より委員長となりました小笠原敦輔と申します。

東北教区放射能問題支援対策室いずみの事務局長・服部様より、本報告のご依頼を頂きました。貴室はいつも私たち「リフレッシュ@かながわ」にご協力していただき、今回もホームページへの広報ご支援をしてくださりました。おかげさまで、今回は12家族39名参加という盛会になりました。まずは、感謝をもって報告を始めたいと思います。

12家族中、全く新しい参加者は6家族、何らかの形で過去にも参加したのが6家族でした。また、参加する子どもたちの年齢が高くなってきており、最年少6歳1名、7歳1名、9歳1名、10歳1名、11歳3名、12歳1名、13歳以上14名となっています。全体で保養プログラムが減少傾向にあること、2013年に開始した本プログラムが、「コロナ」の流行した2年間は中断したものの、その後継続し、ある程度認知されたことにより、多くのご参加が得られました。その反面、2家族9名の方が今回は抽選外となってしまいました。

医療相談は、この「リフレッシュ@かながわ」が立ち上がった2013年度から、さがみ生協眼科

内科、内科部長の牛山元美先生にお世話になっています。先生は会津での活動があるにもかかわらず、このために、いつも駆けつけてくださるのです。今回も3家族から相談がありました。参加された家族からは、「勉強になる。年に一度でも話ができる場はとてもありがたい。牛山先生からしか聞けない貴重なお話によって健康に生きる為の知識を得ることができました。とても楽しかったです。先生はとても親切で安心します」との声が寄せられました。また、今回参加できなかった家族からも、心配なことができたなら相談したいとの感想がありました。牛山先生は医療相談の後ミニ交流会に参加していただき、そこで「原発事故と健康障害2025」と題して、勉強会もしていただきました。熱心な2家族と事務局が最後まで参加し、学びと交流を深めることができました。

初参加の家族の中にはディズニーランドまで行かれたご家族もいらっしゃいました。一方、多くのご家族は横浜、あるいは、その周辺（鎌倉、川崎）を予めよく研究してから訪問先を決めているようです。その中で、中華街、みなとみらいは定番のようです。そして、常連さんの特徴は、あまり遠出をしないことです。また、事務局、特に、毎年福島の家族との連絡役を務めている小笠原公子さんとの再会を喜んでいる家族もいました。

1家族の感想を載せます。

「『GWは横浜へ行けるかな』と子どもたちとの恒例行事になっています。是非また参加したいです。今回はスケジュール変更により大変ご迷惑をおかけしました。そんな中でも温かく迎えてくださったこと、感謝の気持ちでいっぱいです。」

今後とも、神奈川県東日本大震災被災者支援実行委員会の「リフレッシュ@かながわ」にご支援くださいますよう、よろしくお願いいたします。

2025年5月記



## 『かくれキニシタン』上映会と山崎先生のお話し会を企画して

はまぎく（しおたがでの甲状腺検査を広める会） 小原 真喜子

昨年から2回目の塩釜甲状腺エコー検査（2025年3月22日実施）を企画・準備する中で、メンバーと相談を重ね、今年はプレ企画として、3月2日（日）に『かくれキニシタン』上映会と山崎知行先生のお話し会をすることにしました。

会場の多賀城市民活動サポートセンターの場所が分かりにくかったようで、はじめは10人位の参加者で、遠く和歌山県から来ていただいた山崎先生に申し訳ないと心配しました。ようやく開始時刻には31人になりホッとしました。

映画は「保養」に来た家族の思いをインタビューしています。ふだん地元では被ばくの心配など何もないように振舞いながら、実は気になって「かくれて」「保養」に来ている「かくれキニシタン」なのです。なぜ私たちが原発事故から14年経っても「甲状腺エコー検査」を行っているかがわかるような映画でした。

山崎先生のお話しでもチェルノブイリの事故後の対応が日本と大違いなことがわかり、様々な疾患を丁寧に観察していかなければならないとわかりました。アンケートにも感謝の言葉がたくさんありました。

司会をしながら参加者の顔を見ると、「いずみ」で知り合った方がたくさんいらっしゃいました。こうやって活動を支え続けているんですね。ありがとうございます。

2025年6月記



ドキュメンタリー映画「かくれキニシタン」予告編 <https://www.youtube.com/watch?v=Ff4e7z-dMiY&t=34s>

